

シンヒョンケン  
**広島総領事に辛亨根氏**  
**3月に着任**



元韓国原爆被害者協会会長 シンヨンス 辛泳洙氏の長男で被爆二世  
 (関連記事3頁)

# 在韓被爆者

第58号  
 2011.6.2

在韓被爆者問題市民会議  
 〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-66-9  
 ピーコックビル1階アーク印刷内 及川 佐  
 電話 090(4818)7709  
 郵便振替 00130121355828

(もくじ)

◆	脱原発、核廃絶、在外被爆者援護を求める声明	2
◆	被爆二世・辛広島総領事を歓迎する会開催	3
◆	笹本文庫の設立を祝う会開催	4
◆	『封印された原爆報告書』放送文化基金賞受賞	4
◆	特集 原発「事故」について考える 運営委員の意見①	5
◆	詩 牛のささやき	7
◆	詩 沈黙	8
◆	特集 原発「事故」について考える 運営委員の意見②	9
◆	韓国原爆被害者協会会長 厚労省へ要望書提出	11
◆	例会のご案内(7月9日(土)午後1時半より)	11
◆	『フィクションとしての原発』講師 鎌田慧氏	12
◆	総会のご案内	12

市民会議ホームページご覧下さい。  
<http://www.asahi-net.or.jp/~hn3t-oikw>  
 E-mail:jcpd@peace.email.ne.jp

東日本大震災による原発災害にあたって

## 脱原発、核廃絶、在外被爆者 援護を求める声明

私たち、在韓被爆者をはじめ南米、北米などの在外被爆者に対する完全な援護実現を要求する市民は、東日本大震災による犠牲者と被災者及び福島原発災害の被害者の方たちに心からの追悼とお見舞いの気持ちを表します。それとともに極めて深刻な事態に鑑みて、日本政府に対してエネルギー政策の根本的な転換と同時に恒久的な核廃絶への取り組み、広島、長崎の原発被爆による在外被爆者に対する完全な援護の実現について早急な対応を求めます。

### 記

1. 今回の原発災害は、日本にとって広島・長崎の原発被害、ビキニ環礁での第五福竜丸の水爆実験被爆につづく4回目の核被害となります。今回の原発事態は核の「軍事利用（原水爆）」と「平和利用（原発）」が核エネルギー

というコインの裏表にすぎなかったことを立証しました。しかも福島原発の危機状況は依然として続き、国際社会の不安は去らず、世界経済への悪影響が懸念される状況を引き起こしています。日本政府は一分一秒でも早く福島原発事態の解決に全力を挙げるよう強く要求します。

2. 日本政府はこれを痛切な教訓として、菅直人首相がこのほど行われた主要国首脳会議（G8サミット）で「自然エネルギーの利用を拡大する」とした提案に則って、早急に原発依存を脱して、再生可能エネルギーの活用へと安全最優先のエネルギー政策に大きく転換することを求めます。地震国の禍を福に転じさせた時、日本政府は核エネルギーに頼らぬ「暮らし大国」モデルを世界に示すことができると望みます。

3. 日本は被爆国として、核兵器による惨禍と福島原発災害という未曾有の経験を「核なき世界」の建設に生かすため、平和憲法を堅持すると同時に「非核3原則」を法制化し、核廃絶と恒久平和構築の先頭に立つことを強く望みます。

4. 今回の原発事態は、韓国や中国など近隣諸国の人々に強い不安を与えています。その

一方で、これら近隣国から被災者たちに温かい救援の手が差し伸べられています。こうした隣人たちの友情を「共生と平和の環」構築に生かすためにも、日本政府は、私たちがこれまで要望してきたように、在韓被爆者に日本在住の被爆者と同等の、援護法に基づく医療給付などの援護策を完全に実施することを望みます。同時に、侵略の被害者である北朝鮮と中国の被爆者をはじめ、すべての在外被爆者に対する完全な援護を一日も早く実現するよう求めます。

2011年5月28日

在韓被爆者問題市民会議

代表 小田川 興  
事務局長 及川 佐

※連絡先

〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-66-9

ピーコックビル1f

アーク印刷(株)内(及川)

E-mail: jcpd@peaceemail.ne.jp

# 被爆二世・辛広島総領事を歓迎する会開催



が集い、歓迎会を開いた。

韓国外国語大学在学中に、当時の韓国被爆二世の会「ビドルギ(鳩の意)団」団長を務めた辛亨根さんはこんな手記を書いていた。

「ぼくたち『被爆二世』は自分たちの立場と境遇を世界の人たちに知らせ、父母たちの苦痛を広く理解させ、その苦痛が無駄にならぬようにすると同時に、核武器開発に対する警鐘を打ち鳴らし、世界の諸団体と団結して、恒久的な世界平和の建設に重要な一翼を担おうとするものである」。

筆者は歓迎会で「亨根さんが父親の被爆地に赴任したことに『運命の糸』を感じる」と

挨拶。昨夏、初めて長崎・広島訪問をした潘基文国連事務総長に続く韓国出身「平和外交官」としての活躍が期待されていると付け加えた。

辛総領事は着任早々、地元メディアに相次ぎ登場。今夏予定される「日韓学生交流ヒロシマツアー」(早稲田大、高麗大など参加)の実現にも尽力している。

(総領事手記は辛泳沫ら編著『被爆韓国人』(朝日新聞社)収載。同書は家永三郎ら編『日本の原爆記録12』(日本図書センター)に収録されている)

(小田川 興)

## 韓国被爆二世、広島総領事に

【ソウル＝牧野愛博】韓国外交通商省は23日までに、広島で被爆した父親を持つ辛亨根・在瀋陽総領事(57)を次期広島総領事に内定した。早ければ3月にも広島に赴任する辛総領事は「父の遺志を継いで、韓日の親善に努力したい」

と語った。

辛総領事の父は、韓国人被爆者への補償などを日本政府に求める運動に尽力し、1999年に80歳で亡くなった元韓国原爆被害者協会会長の辛泳沫氏。45年に広島で通勤途中に被爆し、67年に被害者

## 亡父、補償運動に尽力

協会を結成。74年には日本国外に住む外国人で初めて被爆者健康手帳を交付された。辛総領事は「父は日本政府には強い姿勢で臨んだが、日本の知識人の支援にはいつも感謝していた」と話す。

辛総領事は78年に外交官になった後、中国勤務が長く、日本には2度の出張があっただけという。それでも「広島には父の友人も

多い。助言を受けたい」と話した。被爆者を救済する市民の会「広島支部長で被爆者の豊永恵三郎さん(74)」「広島市安芸区」は「韓国など在外被爆者の援護問題は完全に解決している訳ではない。日韓では被爆者の医療費などに依然として格差がある。長年頑張ってきたお父さんの遺志を継ぎ、被爆二世として解決に向けた橋渡しをしてほしい」と話した。

## 故笹本征男さんの一周忌

## 笹本文庫の設立を祝う会を3月19日に行いました

笹本征男さんが亡くなってから3月20日で1年になりました。3月19日、笹本文庫設立を祝う会をNPO法人市民科学研究室で行いました。また当日、市民科学研究室の奥まった所にある笹本文庫の入口に笹本さんの遺影かけました。中には彼が収集した資料や出版



3月19日NPO 法人市民科学研究室にて

物などを収めてあります。

また、彼の遺志を継いで市民科学研究室・低線量被曝研究会ですすめてきた研究が報告書『原爆調査の歴史を問う』としてまとまり

当日お披露目されました。祝う会の参加者20名はこの文庫を閲覧しました。その後、自己紹介を兼ね、笹本さんの功績や思い出を語り合いました。3月11日の東日本大震災、福島第一原発による放射線による影響についても議論が交わされました。

### 八月六日放映・NHKスペシャル「封印された原爆報告書」 第37回 放送文化基金賞 受賞（テレビドキュメンタリー番組部門本賞）

5月27日、公益法人放送文化基金のテレビドキュメンタリー番組部門本賞「封印された原爆報告書」が選出されました。選考理由は以下です。

181冊の報告書は、日本では未公開の貴重な資料が数多く含まれていた。これら資料を全て入手し、日米間に横たわる衝撃的な事実を明らかにしている。

膨大な英文の報告書の解説、分析はもちろん、日米両国で高齢の当事者たちを捜し出し、原爆被害の調査報告書に関する重い証言を集め

た粘り強い取材力が調査報道のドキュメンタリーの質を大いに高めた。  
この番組の作成には故笹本征男さんの著書「米軍占領下の原爆調査―原爆加害国になった日本」がベースになっていますし、番組作成にあたって最後まで協力してきました。笹本さんは残念ながら出来上がった作品を見ることは出来ませんでした。きつとこの快挙を喜んでくれていると思います。

（及川記）

6月24日（金）午後6時15分 早稲田大学9号館917教室にて。

NHK広島放送『原爆棄民く韓国人被爆者の65年』上映会を開催します。  
ディレクターが解説します。

特集 原発「事故」について考える 運営委員の意見①

文明と政治文化の大転換こそ！

小田川 興

東日本大震災による福島原発事態は、現代版「富国強兵」策の破綻であり、今なお進行中の恐ろしい現実である

日本は明治維新以来、帝国主義列強に追いつき追い越せとアジア世界で「近代化」の先頭を走り、朝鮮植民地化、中国大陸と東南アジア侵略の末、泥沼にはまり、広島・長崎への米国の原爆投下でおびただしい核被害を受けて降伏。ここでいったんは軍事・経済大志向一辺倒の悪夢から目がさめたはずだった。

敗戦後、日本は平和憲法によって軍備拡張路線でなく経済成長路線を選ぶことができた。そして新「富国」策は国民総浪費社会を生み出した。産業も国民生活も安くて安全な（と見えた）原子力エネルギーへの依存が年を追って強まった。しかし、今回の原発災害によって、安全な原発とは政官業、さらには学界まで癒着してつくりあげた神話だったことが白日の

不思議……？ (抄)

竹内 良男

●(福島)まるでずっと前から反対派だったような顔で被害者面している原発地元町長や県知事のお不思議……？

●(東北)「どうしてくれるんだよう」というような、怒鳴ったり泣き叫んだりする人たちは一人も映さないテレビのお不思議……？

●(東京)巨大な利権とともに原発を推進してきた自民党の誰一人からも「申し訳なかった」のひと言も出てこない不思議……？

●(東京)およそ計算不能の被害を横目で見ながら、社長の給与は何と年間7200万円！社員にもしつかりボーナスも出るという東電のお不思議……？

●(東京)「震災は天罰」などと発言しつつ、一方で核武装論を公然と唱える人物が知事選で260万票も集める不思議……？

●(青森)これだけの大事事になっても、「原発反対」の現職が県議選で10000票も減らして落選する不思議……？

下にさらけ出された。政官財は原発交付金という毒を、快適な暮らしという媚薬で希釈して振りまき、自治体や住民の目をくらましていた。背景には、日本の原子力政策が米仏をはじめ世界各国の核エネルギー政策と原子力産業に連動する「核のグローバルイズム」がある。私たちは今回、核エネルギーの「兵器利用」「原水爆」と「平和利用」「原発」が、実は地球規模で展開される新「富国強兵」(経済・軍事拡大)というコインの裏表だったという、おぞましい事実を突き付けられた。

フィンランド映画『10000年後の安全』は原発廃棄物の無害化には想像を絶する時間がかかることを警告している。人類が生存し続けるには原発依存から自然エネルギー活用へ、文明の転換は焦眉の急である。日本においても心すべきは「神話」にだまされない社会のしくみをつくることである。市民が政治を動かす、そんな「政治文化」の転換が今こそ問われている。

●（東京）原発反対のデモに参加した乳母車の母親たちに問答無用とばかりに襲いかかる右翼の人々の不思議……？

●（近畿）福島と東京の距離に比べると、原発銀座の福井から大阪の距離はその半分以上くらい。放射能を恐れて西へ西へと避難する人たちが多いという不思議……？

●（福島）東電と政府の発表を垂れ流すばかりで、「現場からお伝えします」という記者がテレビにも新聞にも一人もいない不思議……？

◎そして、ヒロシマ・ナガサキから、何にも、そう何ひとつも学んでこなかった私たちの、何という無力……。

危険を後世に残してはならない

有岡道夫

福島第一原発事故の動向は今日なお予断をゆるさない。このような時期においてすら原発が必要だとする意見を聞くのが信じられない。放射能の危険性が、「閉じ込められるか否か」に矮小化して「安全」を議論して来られたからではないかという気がす

《日本の原子力発電所》 出所：チャレンジ！原子力ワールド



る。放射能が外部被ばくは瞬間的に、内部被ばくは累積して人間の細胞を破壊すること、そしてそれが永久に「安全化」できないと考えられていることは周知のことである。

ことが、今を生きる人間にのみ許されていることなのかを議論すべきであると考え

る。100万kWの原子力発電所が1日に核分裂させるウランが3kg、広島島の原爆が800gのウランであったので、一機の原子力発電所が毎日広島原爆4発分の核分裂をさせていることになるといわれる。安全化できない生成物いわゆる死の灰は年間広島ではばらまかれた死の灰の1000発分を超える。太平洋の深海に沈めようが、モンゴルの大地を借りて埋めようが決して安全になることはない。地震・津波を考

え、以前に、先祖から譲り受けた地球上に放射能生成物を人為的に作り出し子孫に遺す

牛のささやき

石川逸子

牛舎で

倒れている 牛たち

道ばたで ハタリ 倒れる牛たち

地震では崩れなかった牛舎が

放射能汚染区域となり

突如避難させられた 飼い主たち

倒れていく牛は知らない

ホウシヤノウという言葉も

牛舎も 自分の乳も すでに汚染されていることを

―福島原発に頼っていたトウキョウでは

原発推進をなお主張 津波被害を天罰と言った男が

トップ当選していた―

息絶えようとする牛は

無人の家近くをさまよう 犬は 猫は

そんなことは知らない

(神国日本は不敗)の次は

(日本の原発は安全) 神話の

生贄になった 動物たち・人間たち

(ハーメルンの男の吹く笛に

いつまで

付いていこうとするのだろうね?)

深夜 牛舎を照らす月光のなか

ものいわぬ牛の遺体が

ひそと ささやき交わすのを聴いた

沈黙

石川逸子

「一番大変だったのは？」

記者の質問に

東京消防隊の隊長は

いつとき 沈黙した

「・・・一番大変だったのは 隊員です・・・」

目に見えない敵 充滿する放射能と戦いながら

瓦礫で車が通れない道を

三百五十メートル近く手作業で 放水ホースをつなげたのだ

「・・・残された家族に申し訳ない

お詫びとお礼を申し述べたい・・・」

こみあげるものを抑えての

しずかな発言

近接圏内を わが家族を 列島まるごとを

放射能地獄に悶えさせないための

必死の 放水作業

(原発を推進したひとたちではないのに)

かたや 一号炉水素爆発の折り

負傷した作業員たちの数さえ「確認」する気もなかった

経産省原子力安全保安院N審議官

「早くしないと処分するぞ」消防隊を脅した政府関係者

事故前には 地震学者の提言を無視

住民の生命より 廃炉が未練で アメリカからの注水機の提

供も断った

東電の体質 許容してきた歴代の政府

快適という麻薬をたしかに飲んできた わたし

隊員の被爆を怖れつつ

しつかと放射能測定器をにぎりしめ 原子炉への

海水投入に全力を尽くしてきた 消防隊長の

いつときの 沈黙

そのわずかな 深い(間)が

啓示した これからの

このくにの 在り方

(どうか もう遅くないことを)

## 特集 原発「事故」について考える 運営委員の意見②

### 「生活の見直し」を

西田和子

私は一九七六年、YWCAの職員になって初めて「核」問題に関わるようになった。「核」否定の思想に立つ」という強調点をYWCAが掲げていたからである。しかし、この「核」は、核兵器のみならず、「原発」をも含めていたのだが、原発については必ずしも会員全体の一一致した考えとまではなっていなかった。それで、「現代文明を問う」という方向から「生活の質」の見直しを展開した。エネルギー消費をどうしたら抑えることができるか、細かい節電の方法などが考えられた。

今回の災害で、今一度、そのことを思い起こしている。社会全体は節電を突き付けられ、自然エネルギーへの転換を叫んでいる。しかし私は、それにも問題を感じている。風力は、自然環境に与える影響にまだ未知数の問題がある、と聞く。大量の太陽光パネルが廃棄物となったとき、どう処理するのか、とある先生は案じ

ておられた。地熱や水力による発電は日本には希望のようだが、これも造り出すためのエネルギー消費は大きい。

ではどうあつたらよいか。私の考えはやはり「生活の仕方」に戻る。「電力不足」ということに振り回されないで、二〇〇三年四月、東電関係の原発がすべて、一日、ストップしたことがあつたそうだ（小林公吉著「原子力と人間」）。しかし、その日、停電にはならなかった。原発による電力無しでも電力は足りていたのである。但し、無制限に使用すれば足りなくなるだろう。著者はこのことを指摘し、社会が一九九〇年代の生活を維持すれば、原発無しでもやっていける。と言っている。

今回、明らかになったように、原発は人の手に負えるものではない。これ以上被爆者を出さないために、また環境汚染を造り出さないために、すべての原発の廃止を願う。そのために私自身の生活の質を見直している。

### 「子供と放射能」

又重勝彦

政府は、福島第一原発を受けて四月に福島県に対し、学校での被曝線量の上限を毎時3.8マイクローシーベルト・年換算20ミリシーベルト以上の場合、子供達の屋外活動を一日1時間に制限するようにとの通知を出しました。が、これは一般人の年間被曝線量限度1ミリシーベルトの20倍です。

これに対し、福島県の父母たちからは5月23日に文部科学省に設定の引き下げを求めると同省を訪れましたが、門前払いされてしまいました。応対に出た科学技術・学術政策局長は、20ミリシーベルトは文部科学省の基準ではないと発言したことが、「東京新聞」5月24日朝刊の記事に出ています。なんとという政府。福島県内では学校に放射線量を下げる対策を求め、国が20ミリシーベルトまで安全と言っていると答える例もあるとのこと。広島・長崎の「入市被爆者」の認定を却下し続けた日本政府。この期に及んでその政府の安全基準をうのみにする学校。

子供を放射能から守れ。

## 人間としての責任―高木さんのお話から―

渡辺 峯

三月初旬、私は愛読する高木仁三郎さんのご著書の一つ、『原発事故はなぜくりかえすのか』を再読していた。改めて緊迫感を感じつつ終わりに近づいた時、あの地震である。

私は学生時代からYWCA（キリスト教女子青年会）に関わっているが、日本YWCAは70年以来、核兵器のみならず、「平和利用」と称する原発にも反対し、「核」のない世界を創り出すことを運動の強調点に掲げてきた。以来さまざまな問題に出会う中で多くの方々と協力し、励まされることが多かった。中でも高木さんの存在は大きく、キリスト者ではないが聖書も深く読んでおられたそのお考えに、私たちは教えられる所が多かった。その中の一つ、ある時YWと関係の深い団体でのお話の一部を不十分ながらご紹介したい。

高木さんは原子力という分野の仕事に入られてから長い間、その社会的問題などは殆ど考えなかったという。しかし研究が進むにつれ疑問も生じ、勤務先もかえ、深く学ぶにつれて、人

間として生きる側から科学を見直さざるを得なくなる。宇宙は広いが、今知られる限りでは生命のある天体は地球だけである。高木さんは「聖書にもあるが、地には地の理、天には天の理、がある。科学者として変な言い方かもしれないが、人間が地上でやっていいことと、いけないことがあるのではないか。これは科学的にも重要なことだ。」と言う。また「地上の自然が成り立つには三つの安定、即ち原子の安定、遺伝子の安定、生態系の安定、が必要だ。ところが原子力は原子の安定を壊してエネルギーを得るわけで生命のない星が光るのと同じ原理だ。私たちは太陽の火を盗んで罰せられたプロメテウスの説話を思い出す・・・。遺伝子についても同じようなことがいえる。遺伝子も自然界の中で変化してはいるが人間の力で好きなように変えるということは生命原理を覆すことで、人間には許されないと私は思う・・・。生態系の安定にしても気候、栄養、あらゆるものが多様な生き物の共生ではじめて保たれ、豊かになっている。

人間は少なくとも自分の分をわかまえることがなければならぬのではないか。科学技術の在り方も自ずからそういう制限の中に成り立つものだと思う。どんなに科学技術が進んでも、人間の知ることとはごく僅かなのだというわきまえ方をした上

で、なおかつ、この生命を育む地球環境を守りぬくこと。この二つの面をしっかりと押さえねばならない。これは『環境』問題ではなく、まさに『人間』の問題、人間の責任だ。人間にはしていいことと、悪いことがある」と語られた。

人間にはこの地上でわかまえねばならぬ責任があることを改めて痛感させられている。

### 原発拡大の歴史的検証を

及川 佐

福島第一原子力発電所の原発『事故』については、歴史を遡って検証されなければならぬ。国家としてどのような方向で進んできたのかを検証する上で一つの手がかりとして『原子力白書』がある。



以下の第一回『原子力白書』が出された昭和31年(1956年)は、昭和29年(1954年)3月1日『ビキニ事件』がおきてから2年後のことである。

当時の原子力委員会委員長である正力松太郎氏は『はしがき』で以下のような文章を載せている。

：世界の原子力利用の尖端はすでに原子力発電の時代に突入しつつあり、この情勢はわが国にも直ちに波及し、原子力発電はもはや現実の課題として登場してきた。

このように原子力利用の奔流に棹さして常に方向を誤らないためには、これまで歩み来た跡を正確な事実に基づいて顧み、かつ原子力平用の将来を展望することが肝要である。：

また、『原子力問題の論議』の中では次のような内容を見ることが出来る。

：原子力の開発を早急に行うべきであるとの意見は国会方面において強調され29年の第19国会に、自由党、改進黨、日本自由党の三派による予算修正案として二億五千万円の原子力予算が提出された。これに対し日本学術会議から「原子力の研究は重大ではあるが、準備の

整わぬ今日、しばらく待ち、その予算は経費削減によつて困難に直面している原子核研究所にまわしてほしい」という主旨の申入れが国会に行われたが、原子力予算は29年3月国会を通過した。ここにわが国最初の原子力予算は

成立して、わが国の原子力の研究、開発および利用はその第一歩を踏み出すことになった。日本学術会議第39委員会においては、原子力

予算が成立した以上、原子力研究の遂行に遺憾ないよう努力すべきであるとの態度をきめ4月20日からの総会にはかつた。総会では激烈な論

議のすえ、第39委員会提案による二つの決議が可決された。：

それから56年経ち原発が50基以上が建設されてしまった。

ここに至つた理由を、経過をとりわけ国家としての意思を振り返つて研究されなければならぬ。もつと言うならば広島・長崎への原爆投下後の国家の意思、ビキニ事件後の国家の意思との関係性も同様に研究されなければならぬ。

### 韓国原爆被害者協会会長 金龍吉氏厚労省へ要望書提出する

4月26日、27日韓国の原爆被害者を救済する市民の会の平野伸人さんらとともに、市民会議からも参加し、韓国原爆被害者協会会長の金龍吉氏及び副会長2名とともに議員懇の谷合議員、辻元議員や小宮山厚労副大臣、松野議員(民主党原爆問題懇談会会長)、厚労省の金山課長補佐の後任の黒木氏・堀岡氏と面談し要望書を提出しました。さらには議員懇会長の斉藤鉄夫議員、近藤環境副大臣(白議員同席)、も訪問しました。



# 例会のご案内

## 「フィクションとしての原発」

講師 鎌田慧氏 (ルポライター・ノンフィクション作家)

日時：7月9日(土) 午後1時半より (開場午後1時)

場所：劇団『展望』地図は下記をご覧ください。

会場費：500円

東京電力福島第一原子力発電所の『事故』による放射能による汚染は広範囲渡っているだけでなく終息の目途すらたっていません。今回の例会にはかねてより原発の危険性を取材を通じながら発表してきた鎌田慧氏をお招きして講演して頂きます。併せて参加の皆さんとともに原発についても議論していきたいと考えております。皆さまの参加をお待ちしております。

### 鎌田慧氏の略歴

- 1938年生まれ、青森県弘前市出身。
- 高校卒業後に上京し、零細工場で働く。その後、早稲田大学第一文学部露文科に入学。大学卒業後、トヨタ自動車の期間工の経験をもとに『自動車絶望工場』を発表、注目を集める。以後、被差別者・底辺労働者など、弱者の立場に拠ったルポルタージュを数多く執筆。
- 1990年、『反骨 鈴木東民の生涯』で新田次郎文学賞受賞。
- 1991年、『六ヶ所村の記録』で毎日出版文化賞受賞。
- 取り組んでいる分野は多岐にわたるが、特に原発関連の著書としては、『日本の原発地帯』潮出版社 1982 のち河出文庫、同時代ライブラリー、『六ヶ所村の記録』岩波書店 1991 のち講談社文庫

## ☆在韓被爆者問題市民会議総会のご案内☆

左記の日程で総会を開催いたしますのでご参加ください。  
 日時 7月9日(土) 午前十一時より  
 場所 劇団『展望』(地図は下記を参照ください)

## 例会会場案内図



場所：劇団『展望』

住所：

東京都杉並区阿佐谷南3丁目3-32

電話 03-3393-2739

(左記の地図参照)

最寄り駅：

南阿佐ヶ谷駅 (東京メトロ丸ノ内線)。

駅から徒歩約2分